様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21 年　5 月　15 日現在

研究種目：　若手研究(B)
研究期間：　2006～2008
課題番号：　18730333
研究課題名（和文）　自らを社会に接続させるメディア・リテラシーの実証研究
—障害者に学ぶ「知の積層」—
研究課題名（英文）　ICT literacy and social participation of people with disabilities
: On the research of their "Stock of knowledge"

研究代表者　柴田　邦臣（SHIBATA KUNIOMI）
大妻女子大学・社会情報学部・講師
研究者番号：00383521

研究成果の概要：
本研究は、障害当事者が自らを社会に参加させるために、ICT を主とするメディアを利用するさいの「知」、リテラシーの積層を明らかにし、典型例のデータを収集・整理して、その道筋を得ることが目的である。そのためには、(1)「知の積層」の具体的な集積過程の調査・分析・整理と、(2)超高齢社会の潮流に再配置するかたちでの理論的な考察の２つが必要であった。
(1)については、障害者の ICT 利用の過程を、社会参加とメディア利用の観点から聞くアンケート調査と、宮城県仙台市におけるフィールドワークを、3 年にわたって実施し、メディアを獲得し利用するさいの「知の積層」のありようを整理しつつ分析することで、当事者主体で形成される「知の積層」の概略と本質を描くことができた。
(以上の成果を受け(2)では、「超高齢化の先進国」としての日本の社会的な文脈に再配置し、「福祉社会化」と「情報社会化」の間に横たわる課題として理論化することをめざした。高齢化し、参加者が減少する社会の中に本研究の成果を位置づけることで、進行形で交錯する福祉社会化と情報社会化に応答する、ひとつのきっかけとして提案した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
18 年度	1,100,000	0	1,100,000
19 年度	1,500,000	0	1,500,000
20 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,600,000	300,000	3,900,000

研究分野：人文社会科学
科研費の分科・細目：社会学（含む社会福祉学）
キーワード：メディア・ICT・リテラシー・障害者・社会参加・福祉・福祉社会・情報社会

１．研究開始当初の背景

我々は、障害者を“助ける”のではなく、障害者から“学ぶ”時代を迎えている。本研究は、代表者がこれまで障害者福祉のフィールドワークの中で得てきた、そのような確信の中でうまれた。ICT(Information Communication Technology)などの新しいメディアは、社会的マイノリティ、特にこれ

まで十分に社会参加できなかった障害者に、ベッド上での情報収集、ネットでの社会的コミュニケーション、さらには在宅就労など、自らを社会に接続させる、多くの可能性をもたらした。代表者は、これまで障害者領域におけるメディア利用をフィールドワークするなかで、身体事情等により当初キーボードやマウスが使えなかった障害者が、装置を自作したり、道具を使ったりする試行錯誤や、ICT利用を自立や就労に結びつけるノウハウを積み重ねた生活に触れてきた。そこには、その人ごとの工夫が詰まった「社会参加のためのメディア・リテラシー」が織りなす「知の積層」が生まれている。これまで本研究のような領域は、リハビリテーション工学や社会福祉学の中で支援者のテクニックとして触れられることはあっても、障害当事者みずからの「知の積層」として評価されたことはほとんどなかった。そのような当事者性に基づいたリテラシーとして評価できるのは、まさに社会学的なアプローチの仕事である。申請者は「障害者自立支援制度」や「介護保険」の改編によって激変する障害者福祉が、日本社会の未来を映し出す「社会のフロンティア」となっていることを実感してきた。メディアによる社会参加という課題は、すでに障害者領域を超え、情報社会全体の問題を先鋭的に示すものとなっている。本研究は、そのような背景のもとに生まれた。

２．研究の目的

本研究の目的は、障害当事者が自らを社会参加させるための、メディアの獲得・利用に関する知（メディア・リテラシー）を、当事者による「知の積層」として評価し、データを蓄積して整理しつつ、その社会的な意味を明らかにすることである。さらにその成果を高齢化する日本の現状に再配置することで、福祉社会と情報社会の交錯上に抽出される、メディアと社会参加の関係を再考する点を目的とした。

その主眼は、当事者がこれまで積み重ねてきた「知」の積層を、データベースによって具体化することにより、今後、参加に関する様々な問題に直面したときに、解決するすべを共有することにある。同時に、私達の社会に必要な参加のための「知の積層」の全体像を描くことで、社会参加の促進が、あらゆる場面で喫緊の課題となっている社会学、障害者福祉、そしてICTの可能性や問題点を示す社会情報学の研究状況に貢献するだろう。

３．研究の方法

研究の手法としては、以下の２つをとった。

(1)「知の積層」の具体的な集積過程の調査・分析・整理

障害者のICT利用の過程を、社会参加とメディア利用の観点から聞くアンケート調査と、宮城県仙台市におけるフィールドワークを、3年にわたって実施し、メディアを獲得し利用するさいの「知の積層」のありようを整理しつつ分析した。

(2)超高齢社会の潮流に再配置するかたちでの理論的な考察

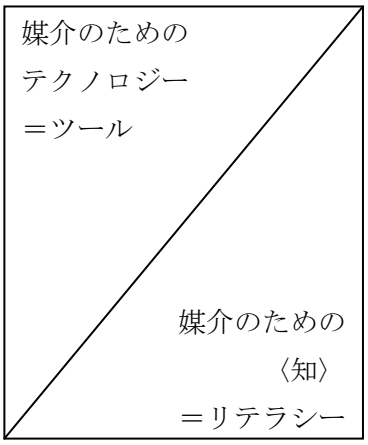
以上の成果を、「超高齢化の先進国」としての日本の社会的な文脈に再配置し、「福祉社会化」と「情報社会化」の間に横たわる課題として理論化することをめざした。

４．研究成果

(1)のアンケート調査に関しては宮城県のNPO、仙台市の外郭団体、東京都のサポートセンターなどにご協力いただけたことで、障害当事者が実際に直面する状況から、どのようにICTメディアを獲得し、利用していくかについての実態を把握できた。またフィールドワークでは、宮城県で障害者へのIT支援をおこなうNPOの協力を得て、まさに「知の積層」が形成される現場にかかわることができ、貴重なデータを得ることができた。その分析の一部は学術論文などによって報告されたが、加えて各種装置を中心とした試用感覚や、それに関連する知の在り方としてデータベースの形で整理しているところである。有意義なノウハウが多いが倫理的な配慮を欠かすことができないため、CD-R・DVDメディアとして、希望する障害当事者に限って共有できるようにすることにしている。

(2)の超高齢社会の潮流に再配置するかたちでの理論的な考察では、「超高齢化の先進国」としての日本の社会的な文脈に再配置し、「福祉社会化」と「情報社会化」の間に横たわる課題として理論化することを本研究のまとめとした。

本研究の成果として、ICTのようなメディアは、単にテクノロジーだけでも、利用のためのリテラシーだけでも描くことができず、以下のように図示される。



このような連続性が存在しているからこそ、障害当事者は以下のような「知の積層」を形成しうる。

a.	ディバイスをインターフェースにし、メディアに形を与えるフェーズ
b.	ツールの作用を受けたり、解釈したり、コンテンツを作り出すフェーズ
c.	法則・慣習・ルールを学び、使用したり、抵抗したりするフェーズ
d.	ルール（の一部）や、新しいテクノロジーや、利用法を作り出すフェーズ

このように整理することで、なぜ障害当事者にとってICTメディアが、単なるスキルだけではなく、社会参加のためのリテラシーとして積層されるべきなのかを、具体的に明らかにすることができた。残された課題は未だあるが、本研究の成果の一部が2007年日本社会情報学会奨励賞を受賞するなど、一定の成果と影響を得られたと考える。

近年注視される少子化・人口減など、“社会縮小”を想起させるような量的な参加者減少だけではなく、10年後に25%を超える高齢化、労働力の減少や、若者のフリーター、ニート化など、質的な意味を含めた「参加減少社会」が危惧されている。その中でたくましく社会に参加しようとする障害当事者の「知の積層」は、私達の社会に次なる処方箋を提示するだろう。これらの成果を、進行形で交錯する福祉社会化と情報社会化に応答する、ひとつのきっかけとして提案できたと思う。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計6件）

① SHIBATA, Kuniomi 2009 Internet is not the Highway to the “Promised Land”, but rather a Pathway to an Actual Community: Employment and Participation for People with Disabilities in Japan Journal of Socio-Informatics Vol.1,No.2 掲載決定、査読有.

② 柴田邦臣 2008「障害者の福祉と社会参加に関するコミュニティ・社会関係資本・ICT－『障害者・高齢者の社会参加とICTメディア利用に関する調査』から」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要―社会情報系―）17』81-91、査読無.

③ 柴田邦臣 2007 「インターネット・コミュニティ・パスウェイ―障害者のICT利用と社会参加―」『社会情報学研究 Vol.12, No.1』日本社会情報学会(JSIS)、査読有.

④ 皆吉順平・柴田邦臣 2007 「生活環境やメディア利用状況は、社会参加に影響を与えるか－若年層に対する『社会参加力とICT利用に関する調査』の分析から－」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要―社会情報系―）16』、査読無.

⑤ 柴田邦臣 2006 「〈情報弱者〉の社会参加―障害者のICT利用と“自立”をめぐって―」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要―社会情報系―）15』81-93、査読無.

⑥ 皆吉淳平・柴田邦臣 2006「若年女性の投票行動と新しいメディア―第44回衆議院選挙のアンケート調査から―」『社会情報学研究（大妻女子大学紀要―社会情報系―）15』95-117、査読無.

〔学会発表〕（計6件）

① 柴田 邦臣 「社会参加するケータイ：移動するメディアから、外出を促すメディアへ」 日本社会情報学会第12回全国大会 ワークショップ報告 2008年9月12日 東京大学

② 柴田 邦臣 「障害者が社会参加するネット利用－宮城 UP「就労-社会参加」プログラムの評価から－」 日本福祉のまちづくり学会 第 11 回全国大会 一般報告 2008 年 9 月 1 日 新潟大学

③ 柴田邦臣，2007，「ケータイと「安全」－メディア社会と福祉社会の交錯から－」第 12 回日本社会情報学会(JSIS)，基調講演と討論（2007 年 9 月 8 日 名古屋大学）

④ 柴田邦臣，2007，「少子高齢社会に社会情報学は何ができるか」第 12 回日本社会情報学会(JSIS)，第 3 ワークショップ（2007 年 9 月 9 日 名古屋大学）

⑤ 柴田邦臣・徳田律子・平田千秋，2006，「障害者向け IT 講習は何にどのように役立ちうるのか－宮城 UP プログラムの試みから－」Assistive Technology & Argumentative Communication Conference 2006 自由報告(2006 年 12 月 2 日 京都国際会館)

⑥ 沼田光政・徳田律子・柴田邦臣，2006，「地域に根ざす障害者向け IT 講習と支援体制－宮城 UP プログラムの取り組み－」Assistive Technology & Argumentative Communication Conf-erence 2006 ポスター報告(2006年 12 月 2 日 京都国際会館）.

〔図書〕（計 4 件）

① 伊藤守編著 2009『よくわかるメディア・スタディーズ』 ミネルヴァ書房

② 小松楠緒子編著 2008 『基礎からの質的調査』三恵社 93-97

③ 福祉用具活用研究会編著,2007,『高齢者・障害者のための福祉用具活用の実務』4801-4912，第一法規.

④ 早坂裕子・広井良典編,2006,『みらいに架ける社会学―情報・メディアを学ぶ人のために』47-63，ミネルヴァ書房.

６．研究組織

(1)研究代表者
柴田 邦臣 (SHIBATA KUNIOMI)
大妻女子大学・社会情報学部・講師
研究者番号：00383521

(2)研究分担者
( )

研究者番号：

(3)連携研究者
( )

研究者番号：